THE BOOK REVIEW PRESS

図書新聞

3543号

定価300円
(本体273円)

BAR
山崎文庫

絶望は無料です。

〒107-0052
東京都港区赤坂6-13-6
赤坂キャステール102
赤坂駅6番出口から徒歩5分
03-6804-5800
営業時間17:00～翌3:00
日曜定休

増田幸弘著『失われた時、盗まれた国』(作品社)を読む

日本型資本主義の傍系の語りが現在の問題(アポリア)を射抜く

「いったいなにが失われ、だれが盗んだのか」?

宗近真一郎

増田幸弘 著
▶失われた時、盗まれた国
ある金融マンを通して見た〈平成30年戦争〉
3・10刊 四六判266頁 本体2400円
作品社

去る四月一三日の夕刻、数時間ごとに更新される「日経電子版」に「円、20年ぶり安値」というヘッドラインが現れた。対ドルで一二六円台前半まで下落した円相場のことである。資源高騰を輸出でカバーできない経済構造と、膨大な国家債務を背景に継続される金融緩和政策のために内外金利差が拡大することで円安スパイラルが加速し、五月に入って、市場は一三〇円を挟んでもみ合っている。

今回の円安は、ロシアのウクライナ侵攻という状況も影響している。日本の対外純資産は、現時点では世界最大であり、従来は、国際紛争などの「有事」の局面では、リスク回避の「円買い」という市場行動の通念があった。だが、昨今では、対外資産の中味が証券投資から直接投資にシフトしつつあることに加え、日本の国際社会でのイニシアティヴの低下が「有事」の「円売り」に繋がったと考えられる。

本書は、「この国はもう、私の生まれた国ではない。国ごと盗まれてしまったのだ」という強い憤りから響き起こされる。著者のモメンタムである。現在の円安に象徴される事態への憤りとも言える。「いったいなにが失われ、だれが盗んだのか」という問いが、香港在住の金融マン笹子善充の境涯をめぐる取材によって解かれようとする。

なぜ、笹子善充なのか。「あとがき」には、「子どものころに同じ所沢で暮らし、またほぼ同じ時期に日本を離れて海外での生活をはじめた共通点が気になった」とある。かなり任意性の強い選択の根拠であり、自己投影も否めない。だが、この選択は大当りなのである。先にドル円相場のヘッドラインのことに触れたが、「日経電子版」に掲出されたディスプレイボードのショットには「外為どっとコム」というタグが現れる。笹子善充は、個人の為替取引の上位に名を連ねる「外為どっとコム」の創業者であり、ブローカレッジのデファクトの確立に寄与した一人なのだ。

日本型資本主義の隘路を描き出そうとする場合、銀行業にまっとうに求心した組織人からは、既往の枠組みの追認以外たぶん何も引き出せない。金融に関わりながら、組織や制度性から遠心し、業態をポッピングして苦楽を重ねた痕跡にこそ、現在の課題の中心を射抜く「異化効果」の契機が現れる。

笹子善充は、一九八五年、当時都銀下位の埼玉銀行に就職。ジョブローテーションを経て、融資係に配属されるが、「継続案件は前回の稟議書を写せばよい」という慣習や、「目先の営業成績」のために住宅ローンやリスクの高い変額保険を強引に売り込む「行く末」に限界を感じ、三年後、人材紹介会社を通じて、為替ブローカーのメイタン・トラディションに転職する。持ち前の反射神経で稼ぎ頭になった笹子は、他通貨セクションを立ち上げ、銀行ディーラーへの接待に明け暮れる。やがて、日銀からの出向者らとの軋轢があり、笹子は、一年の香港滞在を経て、上田ハーローに引き抜かれる。

一九九八年、同社の業績悪化を機に、「夜逃げ」を敢行し、メイタン・トラディションに戻った笹子は、営業部長として、業務プロセス最適化のためにデジタル化を推進し、「電子ブローキングの流れ」に対応する。二〇〇二年四月、社内ベンチャーとして「インターネットによる外国為替証拠金取引」のオリエント・トラディションFXを資本金一億円で立ち上げる。オンラインビジネスは、女性顧客を惹きつけ、一年足らずで軌道に乗り、親しみやすさを狙って「外為どっとコム」に社名変更する。業績の拡大で時価総額が一〇〇〇億円に近くなるが、上場の準備は停滞し、社内で笹子排除の思惑が交錯し、彼は職を辞す。「想定外の出来事だったが、それも仕方のないこととして飲み込むしかなかった。仕方ないの一言ですべてを丸め込めるこの言葉の非合理性こそ、日本だった」。その後、笹子はシンガポールを経て、香港でCCMという名の個人相手のコンサルティング会社を起こし、「外為どっとコム」の保有株譲渡はリーマンショック前日に決着する。

笹子の境涯とキャリアの時系列に即し、「ショウワ」、「サイギン」、「ブローカー」、「ガイタメ」、「ホンコン」の五章建てである。笹子の語りに基づく本筋に、「高度成長という時代」、「1989」、「バブル崩壊」、「構造改革」などのマクロな社会情勢を活写した挿話が折り込まれ、ベースラインのところも、銀行業界再編や為替ブローカーの業務実態や新自由主義の影響について極私的かつ当事者的な記述が縦横する。それらが濃厚に入り組み、すんなり読める本ではない。しかし、本書の記述のスタイルじたいが、資本主義の現場の猥雑かつポリフォニックな運動性の鏡なのである。

ところで、「いったいなにが失われ、だれが盗んだのか」?評者は、興銀出身の吉川元忠の『マネー敗戦』に描かれた日本の経常黒字が円高操作によってオフセットされてしまった仕掛け=為替資金の「帝国循環」や、副島隆彦の「日本属国論」などの知見を踏まえて本書に臨んだ。その場合、盗んだのはアメリカ以外ではない。だが、著者/笹子によるフロントラインの爬行的な物語は、気風良くときに際どいゴシップや告白の果て、失われた日本を盗んだのは日本じしん(のシステム)なのだという自己否定的エチカに逢着すると思われる。それは、実践的には、「盗め」「慣れろ」「調べろ」という日本的ビジネス慣性への痛烈な警鐘を孕むはずだ。

(批評家・詩人)

訃報

本紙前代表・井出彰氏死去

井出彰(いで・あきら)氏=週刊書評紙「図書新聞」前代表。5月8日午前6時30分、白血病のため死去。享年78。故人の遺志により告別式は行わず、葬儀は親族で営む。喪主は妻のひろみさん。

1943年7月6日、神奈川県箱根町出身。早稲田大学第一文学部露文科卒。67年、週刊書評紙「日本読書新聞」入社。同紙編集長として、よど号ハイジャック事件や、作家の三島由紀夫の割腹自殺事件に際し、評論家の埴谷雄高や村上一郎らのコメントや寄稿をもとにいち早く特集を組むなど、政治、社会、文化のうねりを捉える紙面を展開して若い読者を中心に幅広い支持を得て、全共闘運動や対抗文化のオピニオン・リーダーとして書評紙の黄金時代を築いた。

73年に同紙を退社後、出版社・三交社取締役を経て、88年に週刊書評紙「図書新聞」入社。編集長、代表を務め、深まる出版不況の中で出版人たちと読書共同体をもり立て、出版界と書評文化の維持と発展に努めた。2014年に会長。20年に退任後、同紙の発行を継承した武久出版の顧問を務める。また長年、日本大学芸術学部非常勤講師を務めた。

学生時代から文学に傾倒し、小説を発表。「精進ヶ池へ」で第3回小島信夫賞奨励賞受賞。また、里川歩きや民俗文化に関するエッセイなどを書き継ぐ。

主な著書に『精進ヶ池へ』『里川を歩く』『休日、里川歩きのすすめ』『伝説の編集者・巌浩を訪ねて』『地上の人々』『書評紙と共に歩んだ五〇年』『東京発、遠野物語考』、文芸評論家の秋山駿との共著『ドストエフスキーと秋山駿と』ほか。

※後日、本紙にて追悼文を掲載の予定。

連載 ふらんす時評

ヴァカボンの知

カリブ海の映画と文学の現在

福島 亮

大統領選挙の結果、現職のマクロン大統領が勝利した。一点注目しておきたいのは、第二回投票において仏領カリブ海地域の住民の六〇%以上が極右政党のル・ペンに投票したことである(なお、第一回投票で彼らが支持したのは、極左のジャン=リュック・メランションだった)。二〇一七年の大統領選挙ではマクロンの方が圧倒的に優勢であった。だが、今回の選挙でカリブ海地域の住民は、最終的にル・ペンを支持した。特にグアドループでは六九・六パーセントと高い支持率をル・ペンは得た。

なぜ、カリブ海地域の住民はル・ペンを支持したのだろうか。旧植民地の右傾化?まさか。実際、太平洋のフランス領であるニューカレドニアでは六一・〇四%の住民がマクロンを支持している。この違いはどこにあるのだろうか。

さまざまな分析がなされているが、社会学者ミシェル・ヴィヴィオルカは、カリブ海住民によるル・ペンへの投票を「怒り」の表れだと指摘する。この「怒り」を理解する鍵は、大統領選挙の直前になされたある報道に隠されている。

三月二五日、パリ市高等裁判所は、とある農薬被害の調査終了を決定した。四月五日、この決定は大々的に報道され、カリブ海地域から怒りの声があがった。

農薬の名は、グロルデコン。

リブ海地域に
染み付いてい
一九七二年
ロルデコンの
た。マルティ
ループの主要
ナナをゾウム
るためだった
クでこの農薬
ベケ(白人農
アヨットであ
マン美術館舎
ックの産業や
影響力を持っ
ット家である
合衆国で「
名で生産され
は、一九六〇
毒性が指摘さ
一九七〇年年
衆国でケポン
鎖され、使用
る。また、一
界保健機構に
も指摘されて
だが、フラ
九〇年までこ
れていた。さ
年に使用が中
カリブ海地域
まで使用が続
である。言う
だが、バナナ
ス本国で消費
られている。
畑に散布さ
ンは樹上のバ
い。だが、土
る。サツマイ
ど根菜類に加
常的に食べる
被った汚染被